

## 朝鮮半島に対する中国ネット民族主義の台頭とその変容

イタマール・リー<sup>1</sup>

### 要旨

中国の浮上は北朝鮮核問題を含むグローバル・ガバナンスにおける中国の役割に関する中国内の論争を転換させている。1950年朝鮮戦争に対する関与以来、中国は長期的な観点から朝鮮半島の戦略的重要性を考慮した。1970年代後半から中国の改革開放にともなう中国の北東アジアにおける漸進的な影響力増大が注目された。1989年天安門事件と1991年旧ソ連崩壊の余波で、1992年10月中国は北東アジアにおける米国の戦略的資産である韓国と外交関係を作った。冷戦の終結以来、中国の朝鮮半島政策は質的な変化が起きる。

ポスト冷戦期中国の朝鮮半島政策は、中国外交政策の内容だけでなく、さまざまな中国内部の声からも識別することができる。インターネットを包括する通信の急速な発展によって、国際関係と内政問題についての中国民衆の感情と認識を形成する或いは誘導する重要な公共領域として「中国ネット民族主義」(Online Chinese Nationalism)が出現している。中国ネット民族主義とは、中国にインターネットが本格的に導入され始めた1990年代初め以来、中国のインターネット空間で発展している自発的な公論場として定義される。それは近代中国の伝統的な民族主義的情緒と無関係ではないが、中国共産党の公式的な愛国主義とも、また中国の伝統的な民族主義的情緒とも異なっている。インターネット・メディア、オンライン・フォーラム、ブログなどのインターネット通信技術をできるだけ活用して、中国ネット民族主義者は中国の民族主義感情を世界的に鼓吹させようと努力する。同時に、中国に係わる国際問題に関心を持ち、周辺国家から尊敬される強大国としての中国を維持しようとする傾向も見せる。

このような問題意識に基づいて、本研究は朝鮮半島に対する中国のインターネットでの論議を検討して、朝鮮半島における中国ネット民族主義の台頭とその変容を次のような課題を中心に論考する。まず、中国ネット民族主義の韓国と北朝鮮に対する基本的な観点は何か。そして、中国ネット民族主義の韓国と北朝鮮に対する認識の形成と談論が果して中国の外交政策決定過程或いは主要言論媒体に影響を及ぼすか。最後に、韓国と北朝鮮に対する中国ネット民族主義感情と世論を形成させる核心的動因は何か。朝鮮半島に対する中国ネット民族主義の論議を総体的に検討することは、中国の北東アジア地域政策の行方を理解する上で有用であるだけでなく、中国の浮上にともなうその国際的影響力拡大についての中国内部の評価をもって中国外交政策の発展方向を予測することができる。

キーワード：中国の浮上、中国ネット民族主義、朝鮮半島

ICCS Journal of Modern Chinese Studies Vol.4 (1) 2011  
維持し、対外膨張の外交政策を展開することを支持することになる。その代表的なタイプはスナイダーが説明している「帝国の神話」によく現われている<sup>5</sup>。

これに対し、ドイツの政治学者ヒンチェは政治と軍事の密接な関係を外部からの圧力に対する自然な帰結と主張する<sup>6</sup>。これは、対内的な要因よりも国際安保環境に応じたもので、国家構造と外交政策の決定要因として国際システムの重要性を強調する。そのため、国家の対外行動は国際環境の優先順位に基づいてその国家が保有する情報が社会的なニーズと連動して作り上げた結果で、外部的に反応するようになる<sup>7</sup>。国家は国内政治のさまざまな行為主体が保有する目的によって説明することができる外交政策という選択を持つようになる。

冷戦終結に伴う国際体制の構造的変化は中国に内外政策と国家大戦略を新たに再検討させた。中国は米国の対中包圍作戦を防ぐため、外交的に周辺諸国との関係正常化に拍車をかけた。一方、経済成長による国力の向上に応じて、大国意識が強くなった中国国民は新しい中華思想に鼓舞された。日本を含む西欧勢力の中国への嫉妬と反対に強硬に対抗している中国共産党の政策的な努力への支持を表明している。これは、特に中国のインターネットの談話を通じた最近の反日感情や朝鮮半島に関する議論で表出している<sup>8</sup>。

中国民族主義が北東アジアに及ぼす地政学的な影響についての包括的な研究はあるものの、中国内部の視点から中国民族主義の発展過程を観察した研究は十分でない。また、中国外交に関する研究は、主に中国外交の構造的要因を解析することに主眼を置いており、中国外交政策決定の対内的基礎に関する研究は依然不足している。したがって、中国外交の構造的な範囲と国内的レベルを同時に考慮するアプローチが必要であり、中国ネット民

## はじめに

2008年の国際金融危機の中でも着実に進展している中国の経済発展とそれに伴う国際的影響力の拡大は、北朝鮮の核問題を含むグローバル・ガバナンスの行方にも大きな影響を与える要素として注目されており、日本を抜いて初めてアジア最大の貿易大国に浮上しながら、中国内部でもこれについての激しい論争が続いている。

歴史的に、中国と朝鮮半島の関係は「唇亡齒寒」と表現されるほど緊密であった。アヘン戦争以来、孫文によって中華民国が宣布された後、朝鮮半島は中国の国共内戦の深化とともに「二重分裂」するようになった<sup>2</sup>。つまり、孫文の遺志を継承した蒋介石が率いる中国国民党と韓国の民族指導者金九が指導する大韓民国臨時政府、そして毛沢東がリードする中国共産党と金日成が率いる抗日勢力が兩岸の対抗と共に朝鮮半島の分断を定着させ、冷戦を迎えるようになった。

このような歴史的な関係の中で、朝鮮半島は中国の国家利益において重要な領域であるだけでなく、特に国共内戦と兩岸分裂の「対内政治闘争の場」としても機能してきたという点に注目する必要がある。

## I. 中国民族主義とインターネット

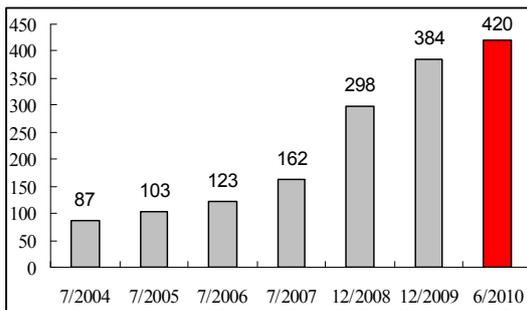
中国の民族主義の攻撃的な性向は、西勢東占と呼ばれる時代的背景と西欧の影響の中で歪曲されたまま輸入したり、影響を受けたりしたもので、国内政治と国際関係の中で選択された国家的決断の形成物である<sup>3</sup>。ドイツの歴史学者ランケは世界での国家地位は、その国家が達成した独立の程度によって決定されるため、国家すべての内部資源を組織化する国家主義論を表明した<sup>4</sup>。これによると、外交政策の優先順位は対内的には権威主義体制を

族主義に関する研究を通じて、中国外交政策と中国民族主義の連動関係をバランスよく理解することができる。特に、朝鮮半島における中国ネット民族主義についての総体的な検討は中国の地域政策の行方を展望することができる重要なテキストを提供してくれるだけでなく、中国の浮上と中国の内部のこれに対する評価を検討することで、中国外交政策の全面的な発展の様相を予測する上でも有用である。

## II. 中国ネット民族主義の台頭とその含意

中国最初の電子メールは、1987年9月に中国北京からドイツに到着し、これと共に、中国のインターネット時代が開かれるようになった。中国インターネット情報センターの最近の報告書によると、2010年6月末までの中国のインターネット人口は4.2億人で、インターネットの普及率は31%に上昇し、携帯電話を経由するインターネット人口も2.7億人に急速に増えたことが分かった。

【図-1】中国ネットユーザーの増加推移（百万人）



資料: 中国インターネット情報センター

中国は言論の自由が厳しく統制されている国家である。にもかかわらず、今日の中国は党と政府がすべてを掌握する完全に制御された社会ではなく、中国の内部にはその範囲と規模が増大している私的な領域がはっきり存在している<sup>9</sup>。

グローバル化と情報化の時代に、インターネットは世論に最も重要な影響を与える要因として出現して、中国内部のニュースや情報への通信を増加させているだけでなく、世界中の中華圏に新たな事実を提供して送信する窓口の機能を果たしている<sup>10</sup>。

一般的に、インターネットはその空間性と方向性において、次のような特性を持っている。すなわち、インターネットは、「十分な動機を持っている一応の人々によって、無限に構成されることができる柔軟な通信ネットワークを提供する。これらのグループによって構成されたものが持つ意味と重要性は、構成されたインターネット空間に付与される形態とその内部で形成された関係によって決定される」<sup>11</sup>。

このようなインターネット空間の意味について、中国のある研究者も、「インターネットは言論の自由が不在の状況で、世論を表現するプライベートな空間として出現した」と明言した<sup>12</sup>。インターネットの出現はニュースや時事問題について、一般人がアクセスするときに中間解析をする記者集団を必要としなくなったことを意味する。それは、中国共産党の説明と再解釈に関係なく、中国の人々がニュースを共有し、意味ある公論場を形成することができるようになったことを意味する<sup>13</sup>。

換言すると、これはインターネットを媒介して中国大衆が、国内及び国際ニュースを取捨選択することができるようになり、これについて自由に意見交換を行うことができるということを意味する。特に、インターネットを通じてニュースを検索し、これに関する意見交換は中国のインターネットユーザーが最も多く実行することで、その中で35歳以下の若者がこのようなニュースを検索し討論するユーザーの4/5を占めるという<sup>14</sup>。

中国の若者層を中心に国内外のニュース或いは重要な問題についての認識コミュニティがインターネットを媒介して形成され、中国のネットナショナリズムを形成することができる土台を作り上げる。中国とインターネットそして民族主義の関係を論議するときに重要なことは、インターネットが情報を習得して共有することにとどまらず、インターネットを通じて一定の参加活動も誘導する政治社会的な側面である<sup>15</sup>。インターネットは人々を結集させ、一定の行動を促したり、誘発する誘因を持っている。それなら、朝鮮半島に於ける中国のネット民族主義の議論はどのように形成され、発展しているか。

### Ⅲ. 朝鮮半島から見る中国ネット民族主義

伝統的に中国と朝鮮半島の関係は唇亡齒寒と言う緊密かつ戦略的な関係だった。歴史的に見ると、朝鮮半島の政治的な流れは中国の直接的な影響を受けており、日本によって朝鮮半島が占領された1910年から1945年を除くと、中国の朝鮮半島への影響力は冷戦期のように全体的に限定的な時期はあったとしても、持続的な影響を及ぼしたと言える。特に、1950年に起きた朝鮮戦争に中国が介入することで、朝鮮半島の分断が定着化し、最終的に北朝鮮と韓国という両国が朝鮮半島に中国の隣国として形成された。何よりも重要なことは、現在の中国も兩岸関係と呼ばれる不和の現実に直面しているということで、朝鮮半島の分断と北朝鮮と韓国への視点と認識を容易に歪曲させることができる誘因を持っている。

北東アジアの歴史を回顧して見れば、朝鮮半島は、中国と日本、日本と米国、ソ連と米国、そして中国と米国という強大国間の熾烈な勢力競争の場として機能してきた。一方、大多数の中国人にとって朝鮮半島は、中国が

近代に経験した長い屈辱の歴史を中国共産党によって再建された新中国が、朝鮮戦争へ介入して米国を中心とした西欧勢力との戦争に勝利し、民族的自尊心を回復した大切な場所だと思われている<sup>16</sup>。そのため、朝鮮半島は中国人にとって中国人の血と汗で守った地域として認識されている。

冷戦期中国の朝鮮半島政策は米国の包囲作戦を突破しながら、ソ連の北朝鮮に対する影響力の向上を防止するために、北朝鮮に対して前向きな政策をとった。しかし、冷戦体制の終結の中で、中国は北朝鮮の丁寧なお願いにもかかわらず、1992年10月韓国と外交関係を樹立することで、一つの朝鮮方針から二つの朝鮮或いは一朝一韓の方針に政策を変更して、政治的には北朝鮮を支持しながら、経済的には韓国との関係を緊密にする実利主義的なアプローチをとった。中国政府の観点から見ると、北朝鮮はパキスタンやミャンマーと共に、中国の多極化戦略に対する利益認識を共有する重要な友好国として分類されている反面、韓国への評価はかなり留保がついたものとなっていることが判る<sup>17</sup>。

2000年代に入って深刻化している北朝鮮の核問題、世界文化財遺産の登録を巡って触発された中国と韓国の感情的な争い、そして高句麗史の解釈をめぐる中国と韓国及び北朝鮮の感情上の縛りは、中国が北朝鮮に対する政治的な考慮と韓国の経済的な政策を並行して推進するとしても、漢族と韓族間の感情的な対立を十分に包容する方向に進むことができないことを示している。

これは、中国の有力新聞である『国際先駆導報』が明らかにした中国ネチズンの周辺国に対する選好度調査結果でも明白に表示された<sup>18</sup>。約12,000人の中国ネチズンたちは最も嫌いな国一位に韓国(40.1%)を選択して、二位日本(30.2%)、三位インドネシア(18.8%)に比べて非常に高い嫌悪感を表明した。一方、

中国のネチズンたちは最も友好的な国として一位パキスタン(28%)を選定し、これに続き二位ロシア(15.1%)、三位日本(13.2%)を選択した。一般的に、中国の反日感情は非常に強いと見なされてきたが、なぜ、中国のネチズンは日本より韓国を嫌い、社会主義同盟国といわれる北朝鮮に対しても好感を積極的に表現しないのか。

これに対して、中国のネチズンも次のような反論を表現している。「私は今回の調査結果を通じて私の予想を超えた二つの事実を理解することができた。ひとつは、サイバー空間の多くの人々が予想外に日本が好きだということだ。もうひとつは、韓国が好きで中国人が本当にいないように見られるということだ。私はそれでもまだ中国のインターネット空間には、韓流に象徴される韓国文化が好きで中国人たちが存在していると信じている」<sup>19</sup>。中国ネチズンの韓国に対する嫌悪感には、韓流に象徴される韓国文化が好きで中国人たちが存在していると信じている<sup>19</sup>。中国ネチズンの韓国に対する嫌悪感には次のように表明される。「中国人の目には、韓国は過去数年間、比較的尊敬を受けていた国家であったが、いまは突如不快な国に変わってしまった」<sup>20</sup>。

一方、北朝鮮に対する中国ネチズンの批判的な評価は次のように表れている。「北朝鮮は、われわれの言葉に従っていない幼弟で、中国の貢献に対して感謝の言葉を表現していない恩知らずな存在である。北朝鮮の挑発的な行為により中国の国家統一だけでなく、中国の浮上という巨大な計画に水をさされるのだから、北朝鮮に対して強力な制御を緩くしてはならない」<sup>21</sup>。

上記のように、中国ネチズンの韓国と北朝鮮に対する感情的な嫌悪感には、2007年以來朝鮮半島における一種のネット民族主義として継続的に強化されてきている。特に、中国ネチズンの韓国に対する嫌悪感と抵抗感には、第一に、中華文明の核心的な価値への韓国の挑発、第二に、戦後世代の中国の若者たちの

韓国と北朝鮮に関する歴史認識がはっきりしていないこと、第三に、韓国の経済成長に賞賛をしながらもこれに対する中国の貢献という相反する認識の衝突、第四に、中国が韓国との経済関係において長期的な貿易収支赤字を抱え続けているという問題、最後に、中国と韓国の人的交流が増えているにもかかわらず、相互間の信頼が幅広く形成されていないことなどが挙げられる。また、ある中国のネチズンは「韓国は私達の友達だと思っている。われわれは歴史問題を含む日本問題に対して共同で対処してきている。中国とアメリカの関係が悪化すれば、韓国によってその関係が回復されることもできる。比較的な観点から見ると、韓国は中国に欠点より利点が多い国家と思う」という前向きな立場も少数だが存在している<sup>22</sup>。中国ネチズンの韓国に対する視点は、中国を認めていない無礼な国家であるという観点と、儒教を含めた中国の過去文化を正しく保存している歴史的な鏡としての重層的なイメージが共存している。

中国ネチズンの北朝鮮に関する観点では、北朝鮮はあまり良い相手ではないが、中国に対して致命的な敵対国だと考えていない。このような観点を代表する視角は、朝鮮戦争で数多くの中国人が北朝鮮のために犠牲となったにもかかわらず、北朝鮮は核とミサイルで中国を脅威にさらし、周辺国の間に不安定をもたらしていると非難している。また、ある中国ネチズンは、北朝鮮が中国の友好国家であるという主張に反論をしながら、「北朝鮮が実際に中国に友好的なことがあったのか。私は絶対にそう思っていない。北朝鮮は最近になっても中国を怒らせるだけだ」と主張した<sup>23</sup>。しかし、中国ネチズンの北朝鮮への普遍的な観点は経済的に非常に劣悪な状況に置かれているので立派な国家ではないが、軍事的な同盟国として中国にとって重要な隣国と認識している。一方、北朝鮮の自力更生を基盤

とした社会主義路線の堅持は、一部の中国ネチズン間で毛沢東主義に対する郷愁と尊敬を呼び起こす一つの鏡として機能しているという点を見落としてはならない。

主に中国東北地方に中国の少数民族として居住している約200万人の朝鮮族に対する中国ネチズンの評価は、まず、中国人という大きな命題の下で、朝鮮族といっても中国人と見て積極的に助けなければならないという見方がある<sup>24</sup>。その一方、中国で韓国人が経営する工場で、朝鮮族は漢族をはじめとする他の中国人と比べて良い待遇を受けるという点を挙げ、敵対感と異質感を表現していることもあるが、これは中国の朝鮮族が韓国人や北朝鮮人と連携して、中国を見下したり脅すこともできるという潜在意識が表れたものと見ることができる<sup>25</sup>。

中国朝鮮族ネチズンは、ほとんど朝鮮族である自分のアイデンティティについて直接的な言及を避けている。しかし、韓国にある朝鮮族のウェブサイト上の、中国朝鮮族による次のような意見は示唆するところが非常に大きい。「以前には漢族が朝鮮族を非常に好んだが、今は状況が変化している。私たち朝鮮族もこのような状況に対してある程度責任がある。なぜなら、私たちの一部は、私たち朝鮮族は漢民族よりも優れていると考えているからだ」<sup>26</sup>。

朝鮮半島に対する中国インターネット上の議論を検討してみると、一部の中国ネチズンは韓国に対して無礼な国家として、北朝鮮に関してはならずもの国家として描写しながらも、中国の伝統文化がよく保存されている韓国への憧れと毛沢東時代の中国社会主義の精神が保存されている北朝鮮への郷愁が交差していることを確認することができる。これらの重層的な朝鮮半島に対する中国ネット民族主義の展開は、朝鮮半島における中国の多様な役割によっても再確認できる。

つまり、中国は北朝鮮の政治的支援者であり、韓国の経済的パートナーであり、韓国と北朝鮮が互いに対立している場合は仲裁者の役割が期待され、北朝鮮の核問題解決のための6ヶ国協議ではホスト役であり、北朝鮮の改革開放を導く師範であり、反日戦略同盟のメンバーであることはもちろん、米国主導の北東アジア秩序を改革しようとする国家でもある<sup>27</sup>。朝鮮半島をめぐるこのような複雑な中国の認識と役割に加えて、兩岸関係のジレンマが朝鮮半島に反映されると、さらに歪曲されて急進的な面をもたらすことになる。

ある意味で、中国の浮上とともに中国の朝鮮半島に対する認識は、相対的に集中力が分散されているといえる。中国政府は、調和のとれた世界と平和的な発展を核心的な国家政策として推進している。にもかかわらず、中国内部からも認知されている国力の浮上により、周辺部に対する極端な自国中心主義が触発されている<sup>28</sup>。これは、特に朝鮮半島における中国ネット民族主義の場合によく見られる。

#### IV. 中国ネット民族主義の政治心理学

では、中国ネット民族主義の韓国と北朝鮮に対する認識の形成と談論が果して中国の外交政策決定過程或いは主要言論媒体に影響を及ぼすだろうか。インターネットを通じて見られる中国ネット民族主義の朝鮮半島への攻撃的なアプローチと抵抗的な感情は、中国の外交政策決定過程にある程度影響力を及ぼすものと想定されるが、中国の対外行動を大きく変化させるのには明らかな限界がある。なぜなら、中国ネット民族主義の根幹となるインターネット空間での活動は、「インターネットコミュニティの不均衡な参加状況、オンライン意見の極端な傾斜、そして中国政府当

局の厳しい統制が、インターネット空間の公的領域への発展を制限しているからだ」<sup>29</sup>。

例えば、高句麗史に関する中国と韓国の感情的な対立は、特にインターネット空間を通じて攻撃的な傾向を見せたが、中国政府は事態の悪化を防止するために、中国の主要ウェブサイトに掲載された高句麗に関するものを2007年2月に一方的に閉鎖させた<sup>30</sup>。にもかかわらず、インターネット空間に強烈な民族主義的感情が存在することは事実で、中国政府は国力の強化にともなう周辺諸国の中国に対する懸念を十分に認識しており、融和的な外交的ジェスチャーを使って影響力を確保するために外交的な努力をしている<sup>31</sup>。

中国ネット民族主義の中国の外交政策決定過程における役割を論じる前に、何よりもまず、中国、日本、そして韓国と北朝鮮がすべて正常な状態の国家でないということを認識する必要がある。特に、韓国と北朝鮮は分断国家として、いまだ統一国家を朝鮮半島に樹立しておらず、韓国と北朝鮮の分断はマクロ的な次元で、中国と日本の協力を防ぐ「二重の障壁」として機能している。中国も地球上のすべての国家から認定を受ける正常な状態になるには多くの時間が必要なのが実情であると中国のある研究者は言っている<sup>32</sup>。

このような文脈で、インターネット上で形成された世論が国内政治の決定要因として、中国の外交政策に一定の影響を与えるといえるが、合理的な国家利益の最大化を持続的に追求する中国の対外行動を決定する要因として機能することには限界がある。しかし、これは中国ネット民族主義が重要でないことを意味するものではない。なによりも、中国において国内問題、特に政治的安定は国家安保の最優先議題であるからだ。

中国は短期的に、中国内のインターネットユーザーとサービス提供者への自己検閲を向上させて、海外の反政府要人らの影響を遮断

ICCS Journal of Modern Chinese Studies Vol.4 (1) 2011  
するのに成功を収めるだろうが、長期的に見ると、インターネットをはじめとする情報通信革命は中国社会の多様性と民主化を求める革命の基地となるものであり、インターネットユーザーの規模が増加し、経済的な発展が遅れる場合は、特にそのようになる可能性が高い<sup>33</sup>。したがって、インターネットは中国の外交政策を含む国家政策の収束過程において重要な要因として機能する。そして、朝鮮半島における中国ネット民族主義の台頭とその変容は中国の内外政策を検討して眺望するのに有用である。つまり、中国政府が主張する平和的な発展、調和のとれた世界、そして持続的な成長は、政治的な改革を含む多様性への包容なく進展することができず、これは中国政府のインターネット政策と、インターネットを媒介して発展している中国ネット民族主義を含む世論と国民感情をどのように収束して形成させていくかと一脈相通ずるものである<sup>34</sup>。

## V. 朝鮮半島と中国ネット民族主義

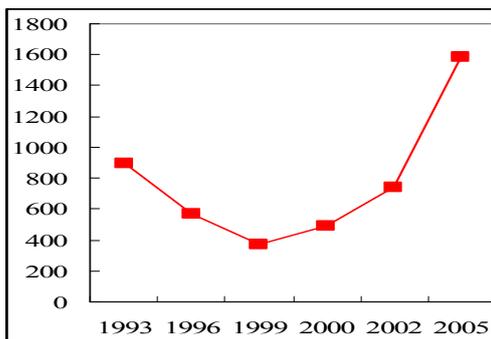
最後に、韓国と北朝鮮に対する中国ネット民族主義の感情と世論を形成させる核心的動因は何かについて論じたい。中国のインターネットと中国の浮上及び中国民族主義に関する研究は、これまで段階的に行われてきた<sup>35</sup>。ところが、中国ネット民族主義が形成された全体的な背景とその眺望をマクロ的な次元で扱った研究はまだ体系的に行われていないのが事実である。

中国の外交政策決定過程に関する分析を含む一般国際関係を研究するとき、国家利益と国民感情を厳密に区別しなければならないという現実主義理論に立脚した主張がある<sup>36</sup>。一方、既存の国際関係理論では国家の威信と国民感情などの重要な分析レベルを排除することは、その重要性を考えると、非常に不適

切だという構成主義理論に立脚した反論も提起されている<sup>37</sup>。ウェントはドイツを構成するのは基本的にドイツ人自らの内部の言説だと主張している<sup>38</sup>。そのため、朝鮮半島における中国ネット民族主義の研究を通じて、もう一つの重要な視野から中国内部の対内外政策に対する認識と評価及び展望を導き出すことができる。

ポスト冷戦期中国の朝鮮半島政策は一つの朝鮮政策から「一朝一韓」という並行戦略を駆使して、北朝鮮とは政治的協力を強化し、韓国とは経済的な交流を活性化する方向に進んでいる。しかし、1990年代後半以降、北朝鮮の先軍主義路線追求によって経済難が深刻になると、北朝鮮に対する中国の経済的関与が増え続けることになり、朝鮮半島全体の中国との経済交流が深化するとともにその政治的影響力も強化されている。このような中国の朝鮮半島全体への経済的、政治的影響力の強化は、北朝鮮と韓国が中国を牽制するために米国に接近する傾向を誘導している<sup>39</sup>。このような文脈で、2006年の北朝鮮核危機や2007年の韓国保守政権誕生の動因を探ることができる。

[図-2] 中朝貿易総額, 1993-2005年 (百万USD)



資料: 韓国統一省, KOTRA など

本研究は、中国の『国際先駆導報』が中国ネチズンに対して実施した周辺国に対する選好調査をもとに、朝鮮半島における中国ネッ

ト民族主義の台頭とその変容過程を追跡し、その戦略的な意味を究明して見た。中国は経済的に浮上しているが、兩岸関係という特殊な現実の中で歪曲されやすい対外認識の構造を持っており、朝鮮半島における過去の圧倒的な記憶と近代の屈辱的な歴史そしてアメリカとの競争意識など、多層的なイメージを中国ネチズンの朝鮮半島に関する反応を通じて知ることができる。

換言すると、中華文明の振興と中華主義の再建を追求する中国民族主義の立場から、北朝鮮はならずもの国家として、韓国は無礼な国家として認識しながらも戦略的利益に応じて、バランスのとれたアプローチをしなければならないという慎重論も内在していた。一方、その裏面には社会主義革命によって天下中心の過去と断絶され、再度、科学的社会主義という修正主義路線を続けている中国の立場で、北朝鮮は過去の毛沢東主義の郷愁を呼び起こす大切な歴史の窓であり、儒教文化を維持している韓国は中華文明の要諦を見ることができる貴重な鏡として機能しているといえる。

つまり、経済的浮上と共に拡散している中国のアイデンティティ喪失危機の中で、朝鮮半島は中国の過去と未来を共に眺めることができる有益なテキストとして機能している点に注目しなければならない。しかし、兩岸関係の特殊性によって、朝鮮半島における中国の外交政策とネチズンの言説は、非常に大きな不安定性を持っているという点を改めて強調したい。結論として、朝鮮半島における中国ネット民族主義は、過渡期を迎えている中国のアイデンティティ喪失の不安感や民族自尊心をよく見せてくれる事例であり、中国が責任ある強大国になるためには、広く開いた視野と認識を持つ必要があるという点を指摘したい<sup>40</sup>。従って、中国ネット民族主義に対する継続的な関心と綿密な研究が、今後も進

められなければならない。

脚注\*

- <sup>1</sup> 香港国際問題研究所・研究員, 韓国現代中国研究所(CCCS/HUGS)・客員研究員
- <sup>2</sup> 滝沢秀樹『朝鮮民族の近代国家形成史序説—中国東北と南北朝鮮』御茶の水書房, 2008年, pp.108-109; 石源華『韓国独立運動と中韓関係論集』民族出版社, 2009年, p.15.
- <sup>3</sup> 中国の民族主義に関する包括的な議論は, 次を参照。Allen S, Whiting. “Assertive Nationalism in Chinese Foreign Policy.” *Asian Survey*, Vol.23(8): pp.913-933, August 1993; Yongnian Zheng. *Discovering Chinese Nationalism in China: Modernization, Identity, and International Relations*. Cambridge University Press. 1999; Suisheng Zhao. *A Nation-State by Construction: Dynamics of Modern Chinese Nationalism*. California: Stanford University Press. 2004; Peter Hays Gries. *China’s New Nationalism: Pride, Politics, and Diplomacy*. California: University of California Press.2004; Christopher R. Hughes. *Chinese Nationalism in the Global Era*. Routledge. 2006; Simon Shen. *Redefining Nationalism in Modern China: Sino-American Relations and the Emergence of Chinese Public Opinion in the 21st Century*. Palgrave Macmillan. 2007; William A. Callahan. *China: The Pessimist Nation*. Oxford University Press. 2010.
- <sup>4</sup> Leopold von Ranke. “A Dialogue on Politics.” in Leopold von Ranke ed., *The Theory and Practice of History*. Bobbs-Merrill. 1973. pp.117-118.
- <sup>5</sup> Jack L. Snyder. *Myths of Empire: Domestic Politics and International Ambition*. Cornell Univ. Press. 1991; Thomas J. Christensen. *Useful Adversaries*. Princeton Univ. Press. 1996.
- <sup>6</sup> Otto Hintze. *Staat und Verfassung: Gesam-melte Abhandlungen zur allgemeinen Verfassungsgeschichte*. Göttingen. 1906.
- <sup>7</sup> Peter Gourevitch. “The Second Image Re-versed: The International Sources of Domestic Politics.” *International Organization*, Vol.32(4): pp.881-911. Autumn 1978.
- <sup>8</sup> Minoru Kakehata. “Unchangeable China.” *Comparative Civilization*, No.22: pp.90-101. 2006.
- <sup>9</sup> Paul Wolfowitz. “Remembering the Future.” in Owen Harries ed., *China in the National Interest*. Transaction Publishers. 2003. p.30.
- <sup>10</sup> Stephan Halper, Jonathan Clarke. *The Silence of the Rational Center: Why American Foreign Policy Is Falling*. Basic Books. 2007. p.205.
- <sup>11</sup> Andrew Feenberg, Maria Bakardjieva. “Virtual Community: No ‘Killer Implication’.” *New Media & Society*, Vol.6(1): p.39. 2004.
- <sup>12</sup> Klaudia Lee. “Web Outcry Lands Officials in Hot Water.” *South China Morning Post*, July 14. 2008. A6.
- <sup>13</sup> Robert J. Klotz. *The Politics of Internet Communication*. Rowman & Littlefield Publishers. Inc. 2004. p.121.
- <sup>14</sup> Jonathan Watts. “War of the Words.” *The Guardian*, February 20. 2006.
- <sup>15</sup> Zixue Tai. *The Internet in China: Cyberspace and Civil Society*. Routledge. 2006. p.169.
- <sup>16</sup> Peter H. Gries. *China’s New Nationalism: Pride, Politics, and Diplomacy*. University of California Press. 2004. p.56.
- <sup>17</sup> Suisheng Zhao. *A Nation-State by Construction: Dynamics of Modern Chinese Nationalism*. Stanford University Press. 2004. pp.276-277.

- <sup>18</sup> 「中国网民邻国印象调查」,《国际先驱导报》, 2007年12月10日.
- <sup>19</sup> 中国ネチズン qinsashi.
- <sup>20</sup> 中国ネチズン iabfw.
- <sup>21</sup> 中国ネチズン langzi24.
- <sup>22</sup> 中国ネチズン hanluanxuan.
- <sup>23</sup> 中国ネチズン elume.
- <sup>24</sup> <http://www.tianya.cn>.
- <sup>25</sup> <http://blog.sina.com.cn/xiaohaitunyanyan>.
- <sup>26</sup> <http://www.moyiza.com>.
- <sup>27</sup> 李明:「中国大陆和平发展与朝鲜半岛形势」,『现代国际关系』,2005年12月,pp.23-28.
- <sup>28</sup> 川島真・毛里和子『グローバル中国への道程: 外交150年』岩波書店,2009年,p.176.
- <sup>29</sup> Junhao Hong. “The Internet and China’s Foreign Policy Making: The Impact of Online Public Opinions as a New Societal Force.” in Yufan Hao, Lin Su eds., *China’s Foreign Policy Making: Societal Force and Chinese American Policy*. Ashgate Publishing Company. 2005. p.108.
- <sup>30</sup> “Chinese Netizens Strongly Protest against the Closing of Chinese Netcafé for the Goguryeo Kingdom.” <http://www.soundofhope.or.kr>
- <sup>31</sup> U.S.-China Economic and Security Review Commission. *2005 Report to Congress*. U.S. Government Printing Office. 2005. p.171.
- <sup>32</sup> 庞中英:『中国与亚洲:观察,研究,评论』,上海社会科学出版社,2004年,p.229.
- <sup>33</sup> Tun-jen Cheng. “Information Technology in China: A Double-Edged Sword.” in Tun-jen Cheng, Jacques deLisle and Deborah Brown. eds., *China under Hu Jintao: Opportunities, Dangers, and Dilemmas*. World Scientific Publishing Co., 2006. p.136.
- <sup>34</sup> Amelia U, Santos-Paulino and Guanghua Wan. “The Rise of China and India: Lessons and Implications for Global Development.” in Amelia U, Santos-Paulino and Guanghua Wan eds., *The Rise of China and India: Impacts, Prospects and Implications*. Palgrave Macmillan. 2010. pp.269-269.; Yang Yao. “The End of the Beijing Consensus: Can China’s Model of Authoritarian Growth Survive?” *Foreign Affairs Online*, February 2010. <http://www.foreignaffairs.com/articles/65947/the-end-of-the-beijing-consensus>
- <sup>35</sup> 例えば, Xu Wu. *Chinese Cyber Nationalism: Evolution, Characteristics, and Implications*. Lexington Books. 2007; Simon Shen, Shaun Breslin eds., *Online Chinese Nationalism and China’s Bilateral Relations*. Rowman & Littlefield Publishers. 2010; James Leibold. “More Than a Category: Han Supremacism on the Chinese Internet.” *The China Quarterly*, Vol.203: pp.539-559. September 2010. などがある.
- <sup>36</sup> Arnold Wolfers. *Discord and Collaboration: Essays on International Politics*. The Johns Hopkins Press. 1962. p. 25.
- <sup>37</sup> Peter H. Gries, Thomas J. Christensen. “Correspondence: Power and Resolve in U.S. China Policy.” *International Security*, Vol.26(2): p.157. Fall 2001.
- <sup>38</sup> Alexander Wendt. *Social Theory of International Politics*. Cambridge University Press. 1999. p.74.
- <sup>39</sup> Scott Snyder. *China’s Rise and the Two Koreas: Politics, Economics, Security*. Lynne Rienner Publishers. 2009. p.214.
- <sup>40</sup> Frank Sieren. *The China Code: What’s Left for Us?* trans. by Thomas Rede. Palgrave Macmillan. 2007. pp.280-281.